

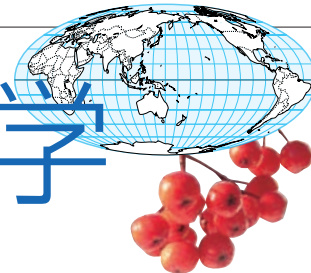
学報

学校法人 北海学園

北海商科大学

アジアの時代に、アジアを学ぶ。

Hokkai School of Commerce Newsletter



Vol.11

2011.12.22

発行: 北海商科大学
編集: 北海商科大学広報委員会
〒062-8607
札幌市豊平区豊平6条6丁目10番
TEL: 011-841-1161 (代)
FAX: 011-824-0801
http://www.hokkai.ac.jp
制作: (株)ラボット

主な記事

オープンキャンパス開催	2面
キャリア・ガイダンスと就職支援について	2面
観光情報学会奨励賞を受賞	2面
交換留学生プログラム実施	2面
韓国全南大学校と交流協定調印	3面
外国語スピーチコンテスト	3面
APQ関連資格概要、教職課程概要	4面
中国砂漠緑化活動参加、留学だより	4面・5面
ゼミ訪問、研究のいま	6面
R12背骨プロジェクト	7面
企業訪問、商学科合同特別講義	7面
北海商科祭 [photo gallery]	7面
後期公開講座開催	8面
浅羽祭、新刊紹介、行事予定	8面
後期課外活動報告	8面
医務室から「二十代の健康 連載4」	8面

Topics 1

北海商科祭報告記

9月24日、前日の夕方に雨が降り心配されたものの、当日は穏やかな天気のもとで第6回北海商科祭が開催されました。例年のように多数のテントが設営され、入口には実行委員の力作である赤い風船のアーチが会場を華やいだ雰囲気にしていました。そのなかで韓国料理、中国料理、うどん、焼き鳥などの定番メニューに加えて、ジンギスカン丼やみそ汁が新登場しました。学生たちの威勢の良い呼び込みの声からは並々ならぬ意気込みを感じました。

今回の大学祭でも、建学の精神である地域に根ざした「開拓者精神の涵養」を踏まえて多彩な催し物が企画されました。イベントステージでは吹奏楽サークルの「演奏会」から始まり、その見事なテクニックをぜひ受け継いでもらいたいと感じました。次いで「のど自慢」ではこの日のために鍛えた歌声に感心しました。さらにサークル連合と実行委員の「ラムネ一気飲み」、飛び込み参加自由の「お絵かきリレー」、プロ顔負けの「ダンス



多彩な企画、多数の参加者で大盛況に！ 第6回北海商科祭開催。

ショーケース」では、掛け声や歓声が飛び交い和やかな雰囲気が会場全体に広がりました。また市内の美容系専門学校生を招いての「Before After」では、女子学生の華やかな姿に観客からはタメ息が洩れていました。恒例の「YOSAKOIソーラン」では、近隣の市民や子供達の『舞とよひら』と北海学園大学『粋〜IKI〜』に加えて、小樽商科大学『翔楽舞』の3チームが躍動感あふれる演舞を披露してくれました。

日が暮れる頃、「アーティストLIVE」では道産子女性ユニット『AonA(あおな)』が素敵な歌とお喋りを聞かせてくれました。そしてお待ちかねのお笑いライブ「江頭2:50と

副総裁」の時間になりました。イヤ驚きました。ステージ前は立すいの余地もなかったのです。内容はさて置きサービス精神満点のパフォーマンスに脱帽でした。

エンディングは抽選会が行われ豪華景品の当選者が発表されました。さらに実行委員長の君野翼君の挨拶があり、

最後に後片付けを終えて大学祭の幕を下したのです。とりまとめ役の代表部や協賛企業の開拓・交渉に走り回った渉外部をはじめとして、各部の実行委員の学生諸君は暑かった夏休み中に一杯頑張ってくれました。本当にご苦労様でした。

(田辺)

北海商科祭を振り返って

大学祭実行委員会 委員長
商学科3年 君野 翼



北海商科祭も今年で6回目数を数え、大盛況のもとフィナーレを迎えることが出来ました。今年の学校祭のテーマ「Ar.C.H」には、本学生はもちろん、地域住民の方々等の人との繋がりを今まで以上に大切にしていきたいという思いが込められています。

準備期間中は色々問題があり、実行委員同士のコミュニケーションが円滑に進まず大変でしたが、大学生活の中でも一番のビックイベント

を実行委員の皆で企画・運営できたことは本当に良い思い出になりました！

学校祭当日は、美容系の専門学生に参加して頂いた「Before After」やお笑い芸人「江頭2:50分と副総裁」によるお笑いライブ等の豪華コンテンツに加え、ハズレ無しの模擬店や縁日等の楽しめる要素をふんだんに盛り込んだおかげで、たくさんの人に楽しんでもらうことができ、涙が出るほど嬉しかったです。是非この思いを来年の実行委員にも味わってもらえるように皆で力を合わせて頑張りたいと思います。

Report 1 中国クブチ砂漠エンゲベ一緑化事業



2008年に本学と栗山町が行った植林活動の記念碑の前に、植林活動に参加した本学学生・教員と栗山町のメロン栽培農家日原和夫さん(左から3人目)……中国・内蒙古自治区

●本学学生、中国クブチ砂漠エンゲベ一の植林活動に参加

2011年8月21日から28日にかけて、本学学生9名が中国北東部・クブチ砂漠の北方に位置するオールドス市エンゲベ一での砂漠緑化運動に参加した。

中国・内蒙古自治区のクブチ砂漠を含む砂漠面積は総面積の約38%に達し、砂漠化は年々進行していた。王明海氏を指導者とするエンゲベ一の砂漠調査が開始されたのが1989年。翌年、

砂漠研究者遠山正瑛氏(元鳥取大学教授)がエンゲベ一を訪問し、王氏とともに当地の治砂事業と緑化運動が本格的に開始された。

王明海氏はオールドス集团公司副総裁を辞してエンゲベ一に留まり治砂事業を続けた。遠山氏は日本の土地家屋を売り払い、その資金をエンゲベ一の緑化運動に投じた。日本砂漠緑化実践協

会を設立し、植樹ボランティアを募り、「5年間100万本植樹運動」を展開した。

ボランティア活動は継続し、1995年8月には目標の100万本植樹を達成した。さらに98年には200万本、02年には300万本の植樹が完成した。参加したボランティア数は延べ7800名以上となり、現在も砂漠緑化ボランティア活動は継続中である。今回、本学学生が参加した緑化運動も、この活動の一環である。

北海学園北東アジア研究交流センター(HINAS/副センター長・本学教授西川博史)は07年から「エンゲベ一

の緑化事業の展開と今後の課題」の研究に着手した。その一環として、北海道の農業技術の移転可能性を検討するため、栗山町との共同研究が開始された。同町のメロン栽培農家や農業関連会社の協力を得て、メロン、トマト、南瓜、馬鈴薯の試植を行い、現在も研究が進められている。これら農作物の生育状況視察と植林活動について、稲場祥太君(商学科3年)のレポートを5面に掲載する。なお、クブチ砂漠の治砂事業と緑化運動については、HINAS『人類の挑戦ークブチ砂漠エンゲベ一の開拓者たちー』(2008年8月)を参照されたい。

Topics 2 オープンキャンパス開催される

今年度のオープンキャンパスは、春の6月、夏の8月、そして秋の10月の3期にわたって開催しました。

第1回は5月25日(土)午前11時15分から入試・広報センター長柳川博より学部学科の説明、次に事務長渡辺聡より大学全般と入試制度の概要を説明しました。午後からは英語、中国語、韓国語の授業を実際に体験してもらうコーナーを設け、来学しなければ体験できない時間を過ごしてもらいました。また、本学の入試担当教員による個別相談コーナーでは参加者個々のニーズに合わせた相談が行われました。

第2回は8月6日(土)と7日(日)に開催しました。学部学科の説明と全体説明は第1回と同様に実施しました。午前の全体説明のあと、本学教授橋本理恵がユニクロの経営戦略をテーマに模擬講義を行いました。身近な会社の事例研究から商学で学ぶ雰囲気を体験してもらえたと思います。語学体験コーナー、個別相談コーナーも前回同様に設けました。入試要項も発表され、参加した



第3回オープンキャンパスでの模擬講義皆さんは有意義な情報を入手できたのではないかと思います。

第3回は10月1日(土)に実施しました。学部学科説明・全体説明、語学体験、個別相談に加え、本学教授相浦宣徳により、北海道のロジスティクスをテーマに模擬講義を行いました。モノの流れの新しい試みを紹介した内容は商学の先端研究に触れる機会となりました。

3期全4回のオープンキャンパス参加者は346名でした。とくに8月は前年同期比127%増の194名が来学されました。これからも参加される皆さんに有意義な時間を過ごしていただけるよう企画を充実していきたいと考えています。(柳川)

Topics 3 観光情報学会「大会奨励賞」を受賞

平成23(2011)年6月に本学で開催された第8回観光情報学会全国大会において、本学観光産業学科3年の宮沢君(大内ゼミ)が「大会奨励賞」を受賞しました。発表論文は『宮沢直斗、藤村翼、大内東：観光案内板の評価と検証～大通駅から時計台までを例として～』というもので、大内先生の指導のもと、藤村君と共同研究を行った成果です。審査委員の感想です。「旅行者に対する情報提供の実態調査・分析の研究の一環として、札幌市の交通の拠点である地下鉄大通駅から観光名所の時計台への案内を取り上げて調査分析を行い、問題点の指摘と改善方法の提案を行っている。案内経路の評価と分析にはFISM構造モデリングとAHPを応用して手堅く分析している一方で、提案の中には、〈個性(ゆるキャ

ラ、萌え系等)を取り入れた案内板を製作してみる〉といった学生らしい視点も盛り込まれていたことが印象的でした」。宮沢君の一言、「まさかこのような賞を受賞できるなんて全く考えていませんでした。これもすべて大内先生のおかげです。これを今後の学生生活の励みにします」。大内先生の一言、「宮沢君は、積極的にこのテーマに取り組み、練習の甲斐あって発表もなかなかのものでした」。



表彰を受ける宮沢直斗君

Report 2 キャリア・ガイダンスと就職支援について

2013年春入社を目指す本学3年生の就職活動が12月1日からスタートしました。経団連が倫理憲章を見直したため、例年よりも2カ月遅れの解禁となりました。本学では、早くから学生の就職支援のために北海学園大学との共同で、就職支援システム「ミナトコム」を導入し、多数の求人情報から職種別や勤務地別などの検索ができるようになっています。また、相談体制を強化するため、キャリア支援センター委員による個別相談を実施しております。

3年生に対しては、4月以降、就職活動の心構えや準備をはじめ、職業適性検査、SPI模擬試験、企業・業界の研究、インターンシップ制度など、就職に直結するガイダンスを毎月実施

しています。4年生には、フォローアップセミナーを開催し、逐次求人情報を開示し、個別の就職支援を積極的に進めております。

こうした包括的な支援体制のほか教科履修単位の中に専門キャリアアップ科目(A P Q)として情報管理論、旅行業務論、社会行政論、税務会計論、通商実務論、P A L(中国語、韓国語、英語)、職業指導などを配置し、実務にも役立つよう配慮しています。

就職活動を乗り切るにはまず、自分を知り、自分の考えをいかに相手に伝えることができるかにかかっています。最後まで自分を信じて努力を惜しまず目標に向かってチャレンジしていただきたいと思います。

(菊地)

OB・OGとの学内就活交流イベント[北海学園大学との共催 11.26・12.3]



写真1 学内就活イベント「LIVE Voice」の全体オリエンテーションでは、道内人気企業の採用担当者、先輩社員・来年入社予定の先輩内定者があいさつを行いました。写真2 「LIVE Voice」オリエンテーションにのぞんだ3年生。写真3 個別業界研究会には、業界を代表する企業が参加しました。

Report 3 2011年度交換留学生プログラム実施

●山東大学威海分校から短期留学生を受入れ

本年度も、交流提携校である中国山東大学威海分校から、引率教員1名と女子8名男子1名合計10名を短期交換学生として受け入れました。

一行は7月2日に来日し、その後北見キャンパスで語学研修と北見市内を見学しながら、日本や北海道について学び、日本人学生とも交流しました。

7月19日からは札幌で日本学の講義をうけ、7月23日には在札交換留学生と合同で地域総合交流協定のある栗山町でフィールドワークを行ないました。今回は新たに栗山町で今年4月に完成した、ゴミの炭化処理施設を見学しま

した。栗山町では、紙類や布製品、木製品など「炭にできるごみ」を分別収集し、この施設で蒸し焼き状態にし、できた炭化物を土壌改良剤や消臭剤、融雪剤や燃料としてリサイクルしています。また、28日には壮瞥町の道の駅「そうべつ情報館アイ」を見学しました。留学生たちは、館内の特産のくだもの・野菜等の直売所や、観光情報館と、日本の道の駅のシステムに興味深く見学していました。山東大学の短期交換学生は、翌29日の修了式を経て30日に帰国しました。(加藤)

■ ■ ■

●2011年度海外派遣学生が出発

「アジアの時代にアジアを学ぶ」ことを教育目標としている本学では、本年度も53名が元気に海外へ出発していきました。

まず、協定校への長期留学(約1年間)のために3年次以降の学生が中国へ2校7名、韓国に3名が前期セメスターを前に出発しました。また本年度1年次後期の協定校への海外語学留学プログラムには、中国(山東大学威

海分校・煙台大学)32名が8月31日に、韓国(大田大学校)9名が9月1日に札幌を出発しました。併せて、中国の国費留学生に推薦された2名も2年間の留学に出発しています。

派遣学生は中国や韓国で、各大学の留学生寮に入ります。本学学生は2人部屋と恵まれているとはいえ、1年生にとっては半年近くルームメイトとの生活など、初めてのことばかりで戸惑

いもあったのですが、既に入寮していた3年生の支援のもと、順調に留学生活に入りました。また、7月に本学で行なわれた短期交換留学プログラムの参加学生が、3年生とともに銀行や携帯電話購入などに同行してくれました。今後とも先輩たちや提携大学の学生との交流を通して、語学だけでなく現地でのより緊密なネットワークを作っていくことを期待しています。(加藤)



7月29日の短期交換留学生修了式



韓国大田大学校へ出発した短期交換留学生



中国へ出発した短期交換留学生



中国山東大学威海分校での中国語授業



日本学の講義を受ける短期交換留学生

Topics 4 韓国全南大学校と交流協定に調印

去る7月20日、本学と韓国・全南大学校との間で韓国語授業を通した教育実習に関する交流協定書が調印されました。全南大学校からは任七星・国語教育学科教授、朴奉基・国際協力本部国際協力課長が来校、20日の11時から北海学園理事長室において本学と全南大学校との交流協定書の調印が行われました。調印式には森本正夫学長（北海学園理事長）をはじめ西川博史大学院研究科長、阿部秀明商学部長、加藤由紀子国際交流センター長ほかが参席しました。この協定に基づき、今後、全南大学校は本学に国語国文学科・国語教育学科の学生を1～4人派遣し、約4週間にわたって本学での韓国語授業を通した教育実習を実施することが可能になりました。また本学の学生は同世代の韓国語ネイティブから

生きた韓国語を学べる機会を得ることになりました。今回の協定書調印と平行して19日から26日まで、全南大学校国語教育学科の大学生・大学院生による授業参加（ボランティア）も行われ、韓国の民俗遊技である「ユンノリ」を通した授業や、スピーチのネイティブ・チェック（発音・文法）などの指導が行われました。（水野）



調印を交わした全南大学校任七星教授（左）と森本正夫学長（右）

Topics 5 外国語スピーチコンテスト

語学力に加え、さまざまな知識・経験を生かして！

中国語、高水準への挑戦

北海道における今年度の中国語スピーチコンテストの日程がすべて終了しました。5月に開催された「漢語橋」世界大学生スピーチコンテスト北海道予選大会には、本学の4年生大串多恵子さん等が出場し、すばらしいスピーチを披露して優勝し、北日本代表として中国で開催された本大会に進出しました。大串さんの本大会への進出で、本学の学生が三年連続して北日本代表として中国語の「世界舞台」に上ったこととなります。大串さんは優秀な成績を収め、中国政府の奨学金を獲得し、現在アモイ大学に留学しています。

11月に開催された全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会には、本学から5名が出場しました。例年に比べると、長期間留学した経験を持



全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会参加者

韓国語弁論大会の結果

去る9月10日、北海道立近代美術館において第13回北海道韓国語弁論大会が開催され（主催：韓国教育院、北海道韓国学園、後援：北海道新聞社他）、本学の向井志緒利さん（観光産業学科2年生）が銀賞、寺谷彩香さん（商学科2年生）、前田あかねさん（観光産業学科3年生）が銅賞に輝きました。「韓国に留学してみて日本人の良いところ、良くないところを深く実感しました」という向井さんは「言



左から、寺谷彩香さん、向井志緒利さん、前田あかねさん

ち、中国語を専攻している出場者が増え、語学力だけではなく、中国に関する知識や視野の面において、これまでにない高い水準のスピーチが目立ちました。こうしたなかで、本学の学生は弁論部と暗誦部の二つに出場し、大いに奮闘しました。弁論部では3年生の杉本有翼君が二位となり、暗誦部では3年生の小野祥輔君が二位、2年生の竹村航平君が三位、同じく2年生の折戸勇雅君が特別賞に輝きました。小野君は、留学経験を持っていませんでしたが、地道に中国語をマスターし、着実にレベルを上げてきた成果をみせました。杉本君は、たゆまぬ努力を重ね、最高レベルへ挑戦し、惜しくも最優秀賞を逃しましたが、豊かな表現力が好評を博しました。（蘇）

葉の壁を越えた観光地へ」というテーマで韓国で経験した日本人・韓国人の生活文化と言語表現の差について発表しました。「韓国人観光客が日本で自由に旅行や買い物ができるような職業につきたい」という寺谷さんは「言葉の壁を越えた観光地へ」というテーマで韓国旅行で感じた旅行業関係者の外国語習得の必要性和観光業をめざす自分の進路について発表し、前田さんは「私の父」というテーマでホテルマンとしてのお父さんの働きぶりと旅行業にける自らの思いについて熱く語ってくれました。「最近はお父さんの後姿が頼もしく見えます」という一言が印象的でした。三人の全体的に参加者のレベルの向上が見られ、一部参加者は詩の読誦を行うなど、例年になく水準の高い大会でした。（水野）



写真左上が小野祥輔君、右上が杉本有翼君、左下が折戸勇雅君、右下が竹村航平君。

外国語スピーチコンテスト、入賞スピーチ紹介



【入賞原稿日本語訳】中国語で羽ばたく 杉本 有翼

小さいころ私には、自分の名前のようにいつか翼を得て自由に飛び回りたいという夢がありました。しかしどうやって翼を得るのか？どこに行きたいのかわかりませんでした。今の私にははっきりとわかります。中国語こそが私の翼です。中国語は私を中国へ、そして世界へと連れて行ってくれます。大学1年生の時、飛行機に乗り中国へ向かう中 私の心は飛び跳ねていました。気持ちが抑えきれず、空に向かって叫びたくなりました：「中国にきた！」すごく興奮しました。そのときの気持ちは今でもはっきり覚えています。しかしながら 中国に着いた後、私には話せたり理解できる中国語があまりにも少ないことをしみじみと感じ、悲しくなりました。自分が勉強してきた中国語は、翼のうちの何枚かの羽で、一瞬にしてなくなってしまったように感じられました。まるで耳が聞こえなくなったようで、はい、いいえしか表現できませんでした。思い出すとすぐに笑ってしまうようなこともありました。はじめて食堂に行ったとき、コーラが飲みたかったのですが、「のどが渴いた 水が飲みたい」といってしまい水を渡され店員と見詰め合ってしまったことなどはずかしいことがたくさんありました。その半年で私の中国語は非常に成長しました。今年の8月に漢語橋サマーキャンプに参加しました。初めてたくさんの外国人と話す機会を得ました。私たちは万里の長城、張家界などに行き、観光や見学しました。本来なら楽しくて仕方ないはずが、私の気持ちは重く暗くなりました。どうして私はここにいるんだろう？みんな私より中国語がうまく、特に驚いたのが韓国の高校生で、背は低くても、中国語はほんとにすばらしかったです。私と彼との差はほんとに大きく、今までどれだけの時間を無駄にしていたのか後悔しました。皆さん、後悔に効く薬がありますか？ないです、もちろんないです。気づいたときにがんばって努力するしかありません。思い立った後は、気持ちが楽になり、恥ずかしくてもできるだけ中国語で交流し、友達になるようにしました。外国の人たちは熱心に、おおらかに、やさしくしてくれました。会話をするときには、氣にかけてくれてゆっくりしゃべってくれました。彼らの手助けでその後は楽しく過ごせとてもいい思い出になりました。中国語の世界を自由に飛び回るには、たくさんの努力が必要なんだと深く感じさせられました。翼があるだけではたりません。努力は嘘をつきません。いつの日か中国語が世界へ、更に美しい未来へとつれていってくれるでしょう。



【入賞原稿日本語訳】文化の違いを通して感じたこと 向井 志緒利

私は高校生のときに韓国の歌手に興味を持ち、それから独学で韓国語の勉強を始めました。韓国語や韓国の文化を勉強すればするほど関心は深まり、実際に韓国に行ってみたく強く思うようになりました。そして去年、その願いを叶えるため北海商科大学に入学し、交換留学のプログラムで大田大学に6ヶ月間留学しました。毎日楽しく過ごすことが出来ました。しかし韓国で生活してみると日本に居た時には考えられなかったような出来事がたくさん起こりました。やはり日本と違うところがあるなということを実感しました。その中でも特に日本と韓国の違いを感じたことが2つあります。一つは、外見に対する意識の違いです。そしてもう一つは日本人は思ったことを遠回しに遠慮して言うことが多いですが韓国人は全員がそうということではありませんが大部分がストレートに言うというところです。一つ目に留学中に出会った韓国人の彼氏にある日「お前は何でそんなに目が小さいんだ？二重に整形したら？」という衝撃的な一言を言われました。いくらなんでも彼女にそんなことを言わなくてもいいだろうと思いましたが韓国では整形が日本ほど珍しいことでもありません。大学入学祝いや誕生日プレゼントに親が子供に整形をプレゼントするという話もあるほどです。韓国人には骨を削ったりシリコンを体の中に入れたりする危険な手術を本当の整形だと考え、二重にすることやボトックスのような簡単な手術は整形だと思わない人が多いそうです。留学中に「整形をするのは賛成か、反対か」について話し合う授業がありました。私のクラスは中国人、ベトナム人、カンボジア人、タイ人と一緒にクラスでしたが私含め、みんな整形については反対の意見でした。しかし韓国語の教科書には反対意見よりも賛成意見の方が長く載っていたのです。「整形をするれば自分に自信が出来るし、面接試験をするときにも有利だ。」というものでした。そして韓国人の先生も「みんな整形をするに反対ですか？韓国人に聞いたらきつと賛成の人もたくさんいるはずなのに。」と驚いた様子でした。どこの国の人でも自身を可愛く見せたいという気持ちはあるけれど韓国人はその気持ちが特に強いような気がします。最近では日本人の考え方もだいぶ変化してきていて、整形費用の安い韓国に行ったら整形をするツアーというものもあるそうです。それでもやはり日本人は韓国人ほど整形をする人が多くありません。日本と韓国の外見に対する意識の違いにとっても驚きました。

その次に韓国人からみると日本人はとても消極的に見えるそうです。「どこに行きたい？何を食いたい？」と聞くと「何でもいい」と答えたりすることや、外国に留学に行ったり観光をしに行っても日本人同士で集まって生活してしまうなど、これは日本人の良くないところだと思います。彼氏に「日本人は個人主義すぎる。外で言うことと心の中で思っていることが違って何を考えているかわからず怖い。」と言われたことがあります。まさかそんな理由で怖いと言われると思わなかったのでもって驚き、その言葉が印象的でした。確かに韓国では少しでも仲良くなれば家族同然のような感覚で気軽に接してくれ、自分の考えを言い合います。そんな韓国人の目から見れば日本人の行動は理解できないところがあるのかもしれませんが。他人とすぐに仲良くなることが出来、心を開いて近づいていくところ、社交性があるところが韓国人の特徴だなと思いました。

韓国に留学してみて日本人の良いところ、良くないところを深く実感しました。韓国について学ぶのはもちろん、同時に日本についても深く考えるようになりました。私は積極的に発言したり人前に出るのが苦手なので、積極的に社交性がある韓国人との出会いは私の中でとても良い経験となりました。相手のことを配慮する日本人の気質と、思っていることはちゃんと言う韓国人の気質を合わせてもっと積極的に行動出来るようになりたいと思いました。

Report 4 APQ関連資格の概要 [商学系資格編]

このコーナーではこれまでにたびたび語学系と情報系のAPQ科目とそれに関連した資格試験についてのご紹介をしてきました。語学系では難関といわれるHSK（中国語）やTOPIK（韓国語）などの人気が高く、それらは会話能力の向上や外国語スピーチコンテストで多くの上位入賞者（優勝者を含む）を輩出するなど既に顕著な成果を生んでいます。また情報系ではMOS（マイクロソフト・オフィス・スペシャリスト）が一般にも有名ですが、本学では3つの部門全てにおいて毎年ほぼパーフェクトという高い合格率を誇っています。そこで今回は新たに商学系の資格検定である財務会計能力検定と貿易実務検定の2つについて取り上げてみたいと思います。実際これらの資格は一般には余り知られていないせいもあり地味な印象を受けがちです。しかし本当は決してそうではありません。なぜなら会計も貿易も本来商学の中で大きなウエートを占めている分野であるからです。換言すれば数多い商学部の配置科目の中でも最も「商学部らしさ」が感じられる分野といえるかもしれません。実はこのことがみなさんの就職活動にも重要なポイントとなります。みなさんが学ぶ商学という学問領域は実学としての色彩が強いのが特長です。そのため周知のように商学部には専門領域の研究と並んで理想的な企業人となるための人材の育成が常に社会や企業等から強く求められてきました。もちろんそのことは今後も変わらないと思われます。商学部には元々企業人として必要な見識や技量などを学ぶための科目が数多く存在しています。ですから「商学部らしさ」を身に付けることがみなさんの就職活動にも大きなプラスとなることは間違いありません。商学系の資格試験である財務会計能力検定や貿易実務検

APQ関係検定試験合格者

科目名	試験名	等級	2010年度
PAL (Ⅰ～Ⅳ)	HSK (中国語) ※2010年度より 新 HSK	新 HSK 6級	6
		新 HSK 5級	7
		新 HSK 4級	20
	TOPIK (韓国語)	6級	-
		5級	1
		4級	3
		3級	-
	TOEIC (英語)	800点以上	-
		700～799	-
		600～699	1
		550～599	2
		500～549	2
情報管理論 (Ⅰ～Ⅲ)	MOS マイクロソフト オフィススペシャリスト	Excel	50
		Word	44
		Power Point	27
財務会計論 (Ⅰ～Ⅲ)	財務会計 能力検定	1級	1
		2級	41
		3級	10
	日本商工会議所 簿記検定試験	2級	2
		3級	12
通商実務論 (Ⅰ～Ⅳ)	貿易実務 検定	B 級	1
		C 級	6
旅行業務論 (Ⅰ～Ⅳ)	旅行業務 取扱管理者	国内	7
		総合	-

【注】TOEICに関しては、PAL (Program for Advanced Language) 受講者以外の受験者を含む。韓国語能力試験については平成22年9月現在の受験合格者数。

定はみなさんが社会や企業に対して「商学部の学生らしさ」をアピールするための強い武器となるものです。それは法学部や文学部などの他学部出身者との差別化を図ることで企業からの内定を獲得するためにも大切な視点といえるでしょう。商学系の資格が先の語学系や情報系の資格などと大きく違うのはその点です。わが国の長びくデフレ経済を反映して企業の学生を見る目も年々厳しさを増しています。みなさんには本学のAPQ科目を積極的に活用して自身の幅広いレベルアップに役立てて欲しいと願っています。もちろんAPQ科目で取得した単位は本学の卒業単位にも算入されるのでどうぞ安心して学習に励んで下さい。

(松原)

Report 5 教職課程の概要

本学の教職課程では、高等学校教諭Ⅰ種免許状〔商業科〕、同〔公民科〕の2種類を取得することが出来ます。

現在、ここ数年で、一番多い19名の2年生が教職で頑張っています。本学の教育課程では、2年生から教職を希望することも可能であり、19名のうち、2名は、そのメンバーです。教職課程を希望する学生の動機は様々ですが、やはり、一番多いのは、影響を受けた教師の存在です。企業で必要とされているプレゼン能力も身につきます。

昨年度、公民で現役合格者が誕生、この4月から公立高校の教師として頑張っています。公民の採用試験の合格者は、2名でしたので、そのうちの一人が本校の学生でしたので、すばらしい快挙です。また、昨年度の卒業生では、教職を最後まで希望した3人のうち1人が道立高校で期限付き教諭として、2人が私学の教員として教壇に立っています。本学の商業科教員については、前身の北海学園北見大学のⅠ期生が昭和56年に採用されて以来、86名の卒業生がおり、期限付き教員などを含めると100名程度の卒業生が、全道各地の高等学校教員として活躍し

ています。この数字は、道内の高等学校商業科教員の5～6人に1人が本学の卒業生であることを意味しています。

本学では、普通科高校を卒業した学生のニーズに応じて、公民科の免許状を取得する学生のニーズが高まっています。公民科免許状を取得しておく、後に、科目履修等の機会を得て地歴科免許状や中学校社会教員への道を開くことも可能となります。この原理は、商業科免許状をベースとして、情報科への道が開かれることを意味します。

教員採用が狭き門となっている現状を考えると教員になれる人は限られますが、ぜひ、大学時代にしか成すことのできない教職課程を履修し、広い視野に立って、人間的な成長を図ってもらいたいと願っています。

(大友)



教職課程の講義

特集 中国クブチ砂漠緑化事業への参加

この夏8月21日から28日にかけて、本学学生・教員11名が本学と連携協定を結ぶ自治体栗山町の職員・農業者の方々4名と、中国・内蒙古自治区クブチ砂漠のオルドス市エンゲベーでの砂漠緑化事業に参加しました。その活動について商学科3年生稲場祥太君に寄稿してもらいました。

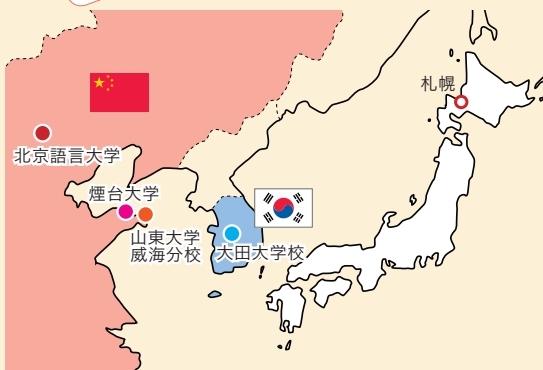
中国・内蒙古自治区（赤線は今回の旅程）



写真①緑化の取り組みが効果をあげている現在のエンゲベー ②植林活動を終えた栗山町職員の皆さんと本学学生・教員 ③～⑥植林活動 ⑦1980年代に緑化に取り組んだ当時の宿舎（現在も保存展示されている） ⑧栗山町の栽培技術で育ったメロン ⑨豊富な種類の野菜が育ちつつある



留学だより 現在、長期留学中の学生から便りが届きました。



現在、本学学生は提携校である中国山東大学威海分校に18名・煙台大学に21名、国費留学生として厦門大学・海南大学・黒龍江大学・山東大学済南本校、北京語言大学に各1名が、韓国には提携校の大田大学校に12名がそれぞれ半年～2年をかけて留学中です。

●皆川 隆貴（商学科3年）

私は今年の9月から北京語言大学に留学しています。以前、中国の煙台大学に交換留学生として半年間留学した経験があります。日本に帰ってきてから、中国にもう一度留学したいとずっと思っていました。そしていろいろな人の手助けを頂き今回の留学を実現することが出来ました。



授業の仲間と（前列中央が皆川君）

留学生活は常に中国語を使う環境に身を置いているので、伝えたいことを上手く伝えることが出来ない事がよくあり、常に自分の能力のなさに不甲斐なさを感じています。しかし、このような環境だからこそモチベーションを高く持ちながら勉強に励むことができ、充実した一日一日を過ごしている気がします。授業は常に活気にあふれており、宿題も多く毎日とても忙しいです。またクラスでは班長を務めており、各国の人々をまとめることはすごく大変ですが、やり甲斐も感じています。北京語言大学には各国からたくさんの人々が留学しており、私もたくさんの国の人々と国際交流をしています。授業の一環として、討論をすることがよくあり、そうした授業の中で彼らとの価値観の違いを認識し、心を揺さぶられ、自身の新たな価値観を見だせる大きなキッカケにもなっています。このような国際交流は現代の錯乱する情報社会の中で物事をフラットな考え方で判断するためにとても重要な事であり、また交流することによってしか知り得ない情報や知識はこの社会で生き抜くための大切な資料だと思います。私は今回の留学でたくさんの資料を手に入れることができと思っています。

留学して特に感じるがあります。それは言葉というのは一種の道具でしかないということです。本当に必要なのは彼らの文化を理解する事ではないでしょうか。私は今回の留学で中国語の能力を高めることは当然ですが、中国に関する知識もこれからより深いものにしていきたいと考えています。

■今回、砂漠緑化運動に参加した学生



左上から（商学科3年）稲場祥太君、（同）堤直也君、（同）広瀬直沙さん、（同）皆川隆貴君、（同）塚本智明君、（同）長谷川徹君、（同）齋藤淳史君、（観光産業学科3年）松浦隼人君、（同4年）中井龍君



現在も広がる砂漠の風景（丘の上で地平線を眺める堤直也君）

私はこの夏、西川先生からの呼びかけで中国の庫布其（クブチ）砂漠。その北辺に位置する、内蒙古自治区鄂尔多斯（オールドス）市恩格貝（エンゲベー）鎮での砂漠緑化運動に参加させていただきました。

1年生の時に半年間中国の煙台大学に留学をし、帰国後も授業や中国語サークルを通じて中国人留学生との交流を続けてきました。中国をもっと知りたいという気持ちはもちろん、環境問題としての砂漠についても昔から興味・関心を持っていたので、いい機会だと考えました。

今回の活動は植林活動の他にも、以前北海商科大学と栗山町の方々と協力して植えた木々の確認や、商品化のため実験的に栽培している果物や野菜の視察も兼ねていたので、栗山町の方々も同行されました。

現地到着後、日本人開発者である遠山正瑛先生の記念館や、以前植林が行われた場所、昨年建てられたばかりの砂漠科学館、ビニールハウスなどを見学させていただきました。エンゲベー

での植林活動の軌跡を学ぶことができ、中国が砂漠を人間が住むことのできない荒地ではなく、積極的に利用すべき土地であり貴重な資源であるという考えを持っていることが伝わってきました。

植林活動の前に砂漠地帯を見学させていただきました。テレビや写真などで砂漠の映像は何度も見たことがありましたが、自分の目で「本物」に出会える興奮で胸が高鳴りました。一つ砂

中国での砂漠緑化運動を終えて

●商学科3年 稲場 祥太

の山を登りきると、そこに現れた景色は、まったく音のない静寂の中に、360度どこまでも広がる壮大な砂の大地で、まるで異次元のような世界でした。

その景色を目の当たりにした時、自分の中の砂漠に対する考えが変わっていくのがわかりました。砂漠化は確かに地球が抱えている問題の一つかもしれませんが、しかし砂漠が広がっていくことは問題ですが、砂漠が存在するこ

と自体が問題なわけではないのでしょうか。これからは砂漠をなくそうという考えではなく、これ以上砂漠が広がることを、緑化活動などを活発に行うことで防ぎ、今ある砂漠はうまく活用していくべきであると考えようになりました。砂漠が姿を消すと砂漠で生活している生物も姿を消すこととなるので、生態系に何らかの影響が出るはずです。そして何より砂漠はこんなにも美しい場所であり、地球の

しでも多くの人に知ってもらい、広めていくこと。そして活動を後輩へと引き継ぎ、緑化を進めていくこと。さらには砂漠の素晴らしさを伝え、植林のボランティアを目的とする人だけではなく、観光として砂漠の地に向かう人を増やすことではないでしょうか。

エンゲベーでの緑化活動は自分にとって本当に実りのあるものでした。異文化と交流することによって自分の中の世界観が広がったことを確かに実感しています。日本で生活しているだけでは得られない経験ができたこと、それはこれからの自分に大きく影響を与えることになると思います。これからは、北海道、日本、アジアさらには世界と自分の視野を広げていき、物事を色々な角度、視点で考えられるようになっていきたいです。それはこれからの社会生活にも役立てていけると思います。

この度の緑化活動に誘ってくださった西川先生には大変感謝しています。またこのような機会があれば積極的に挑戦していきたいと思っています。



大田大学校のサポート学生と(左から2人目が伊豆野さん)

でも中々現れない韓国人、これはなぜなのか最初は理解ができなかったけれど、コリアンタイムという文化なのだという事を知りました。これに慣れるまでは結構時間がかかりましたが、今では韓国の一つの文化なんだと理解し、私も専らコリアンタイムで過ごしています。でもやはり約束時間はジャパニーズタイムが私は好きだなと思いました。

韓国の好きな文化も見つけました。それは先輩、後輩と上下関係があるのは日本も同じですが、友達や先輩との対人関係の距離が近く、いつでも気軽に話かけたり、一緒に食事をしたり、特に後輩が先輩を呼ぶとき、男女で異なりますが、○○オンニ!や○○ヒョン!の様に名前にお姉ちゃんやお兄ちゃんをつけて呼ぶ呼び方が可愛らしくてとても好きです。今まで仲良くしてくれている友達もみんな親切で優しく、一緒にいてとても楽しいので、これからも良い関係を築いていけたら良いなと思いました。友達との出会いや、素敵な思い出を沢山作れるように、語学の上達にも、最善の力を尽くしたいと思います！

●伊豆野 まい（商学部1年）

留学生生活をスタートして、今丁度折り返して地点となりました。韓国での生活に慣れるまで、結構時間がかかったのではないかなと思います。具体的には韓国人と日本人の約束感覚が違うことです。約束の時間の5分前には準備が完了している日本人と、10分や20分、更には30分が過ぎ

●扇谷 宏平（商学部1年）

中国に来て最初は慣れないことばかりでした。食事を中心に生活や習慣に慣れず、見るもの聞くものは中国語だらけでわからず、正直すぐにでも日本に帰りたいかったです。それでも少しずつ環境に慣れていき、特に食事に関しては大学内に9つ食堂があり、メニューも豊富で今では楽しみになっています。

留学して特に面白いと思うのは覚えた単語などをその国の生活の中で実践的に使えることです。買い物、食事の注文、日常会話などで前は聞き取れず話せず読めずのものでも、調べたり勉強したり会話の中で学び、後に使うことができるとうれしくそして面白いです。もう一つに国際交流があります。以前からそういうことに参加してこなかったのが中国人はもちろん同じく留学している別の国の人たちと交流できて新鮮で楽しいです。ただ一つ思うのは、僕は自分の国を知っているようでよく知らないということです。日本のことについて聞かれてわからないとよくそう思います。国際化の流れの中でまず自分の国のことを知るのも大切だと感じました。

中国のことを学ぶと同時に自分のことも見つめなおす良い機会になりました。留学に来てよかったです。残りの時間も大切にしたいと思います。



日本語学科の学生との交流会

●稲田 悠希（商学部1年）



上海旅行の記念写真

の違いを理解することで国の壁を越え交流を深めることが出来るということを学びました。最近では中国人だけでなくこの山東大学に僕らと同じく交換留学に来ている韓国人の学生とも交流する機会があり、一緒に夕飯を食べに行ったりなどして交流を深めています。

勉強面ではどの授業も親切 な先生ばかりで、僕らがわからないところがあれば理解する

中国での生活も残り少なくなってきた、時間の貴重さを感じる今日この頃です。生活にもだいふ慣れ、こちらの日本語科の学生たちが開いてくれる交流会などを通し中国人の友達もでき、充実した毎日を過ごしています。

来たばかりのころは日本との文化の違いに驚くことや戸惑うことがたくさんありました。ですが知り合う学生たちはどの学生も親切で積極的な人ばかりで、お互いの文化

まで親身になって教えてくれますし、僕らもそれを聞き取ろうとすることでリスニングの力は着実に身についてきていて、おかげではじめのころはなかなか聞き取れなかった先生方の話も今は大体理解できるまでになりました。スピーキングはとっさに言葉が出てこなかったり、発音や声調が違って通じないなどまだまだですが、日常生活や中国人と交流する際は皆積極的に中国語をつかったりなど、徐々にではありますが成長してきています。例年こちらの大学では恒例になっているらしいサッカーの大会には、今年も僕も含めた8人の留学生がこちらの翻訳科の学生と参加し、惜しくも優勝は逃しましたが、準優勝という成績を残し、 サッカー以外にも最近開かれたバドミントンの大会では、2人の学生が参加し、見事好成績をおさめました。

僕らよりも先に留学に来ている3年生の先輩たちにも多くのことを教えてもらい支えられ、この約3カ月を過ごしてきました。9月には上海へ旅行に行ったのですが、今月は北京への旅行も控えています。残りの約1カ月、日本では絶対に経験することの出来ない留学という貴重な時間を一日一日大切に過ごし、たくさんのこと吸収して一回り大きな人間になって日本に帰れたらと思います。

ゼミ訪問 1

伊藤 昭男 観光研究ゼミナール



自由な発言が飛び交う伊藤ゼミ。観光研究に加えて、ビジネス全般にわたる知識の修得をめざしています。

伊藤ゼミは毎回2部構成で行われています。前半は時事問題に関わるディスカッションです。テーマはゼミ生のもちより。分野は観光に限らず、国内外も問いません。オリンピック問題、ギリシャ危機、TPP、ときには少子高齢化について議論することも。

後半はテキストの読み合わせ。今期は「通貨を読み解く世界経済―ドル、ユーロ、人民元、そして円（小林正宏・中林伸一 中公新書）」をテキストに、国際金融への理解を進めました。

観光研究ゼミナールでありながら、ビジネス全般にわたる幅広い知識の修得をめざす理由について、伊藤先生は次のように話します。「いま社会や観光業界が求めているのは、観光とビジネス両方の知識を修得した人材です。本学の観光産業学科が商学部であること

ゼミ訪問 2

加藤由紀子 社会文化ゼミナール



加藤ゼミは、栗山町をフィールドとしたサービスラーニングに毎年取り組んでいます。めざすのは、地域と主体的に関わる実践学習です。

1年生の第1 semesterで開講している社会文化ゼミナールのうち、加藤ゼミでは「サービスラーニング」のつとめ、栗山町をフィールドとしたプロジェクトに毎年取り組んでいます。

サービスラーニングは、学生の学びと社会への活用奉仕を合わせた学びの形です。地域の課題にプロジェクトとして取り組み、学生は実践方法と経験を、地域は課題の解決方法を得ることができるのです。

2011年度のゼミ生は10名で、2つのプロジェクトに分かれて活動しました。

ひとつが「栗山町の自然と歴史を知る」グループ。栗山の豊かな自然と歴史の深さを掘り起こし、その魅力の発信方法を提案するこ

もふまえ、当ゼミでは金融や時事問題を同時に学んでいるのです」

学んだ知識を実社会で役立てる。そのために実践、実体験も重視しています。その取り組みのひとつが、学外の公募コンテストへの参加です。

2011年度前期には、日本経済団体連合会主催の「家族」で楽しむ！エコ&ロングステイ観光」アイデアコンテストに2つのグループで応募。

後期は日本ホテル教育センター主催の学生懸賞論文コンテスト「観光立国で日本を元気にする方策について、私の提案」に各ゼミ生が挑みました。

昨年度3月には、海外での実体験によつて



伊藤ゼミ台湾研修

学習意欲を高めようと、4泊5日の海外研修へ。行き先は台湾です。ゼミ生は「辛亥革命100周年」の節目を迎えた台湾で、大いに視野を広げ、日本のすがたを再認識しました。

とが目標です。

もうひとつが「栗山なのに栗がない栗山町の特産品の原点を知りその発展を考えよう」グループです。栗山という名前は栗の木が多かったことに由来しますが、伐採などでその数を大幅に減らし、現在、町が栗の木の植樹を進めています。そのことから、栗を資源として活用などを提案することを目指していました。

プロジェクトの要は、現地でのインタビュや見学を行う6月のフィールドワーク。これに向けて現況の調査、課題の洗い出し、取材のアポイントメントといった準備を行います。フィールドワークの後、しめくくりとしてゼミ内で報告書作成に向けてプレゼンテーションを行いました。

加藤先生は「実践を通して主体的な学びの姿勢を身につけてほしいと考えています。早いうちに社会との接点を実感することは、その後の学びにきつと役立つでしょう」と話します。

「自然と歴史」グループは、調査結果と課題、次世代への継承などを提案としてまとめ、「栗」グループでは、栗の活用やレシビ本などで町をアピールすることなどを提案として



伊藤ゼミのみなさん

この研修は今年度も実施予定です。

現在のゼミ生は、2、3年生合わせて10名。

「伊藤ゼミでは世の中で毎日起こっているなにかについて具体的に知ることができま」と話すのは、今年度からゼミに加わった庄子咲耶さん（観光産業学科2年）です。

先輩である長谷部裕己君（同3年）は「先生は厳しいけれど得るものが大きいですよ（笑）。雰囲気も含めて大学生らしいゼミです」と話します。自由な意見が飛び交う活発さと、発言しやすい和やかな空気が教室を包んでいました。

まとめました。これらの提案は報告書としてまとめられ、栗山町へと届けられる予定です。昨年度、開通を目前とした札幌駅前通地下歩行空間の広場について、札幌市が活用方法を募集しました。本学からは現2年の学生5名が応募。そのなかには加藤ゼミの「卒業生」も参加していました。

「このゼミで得た社会への関心と主体的に学ぶというスタンスは、ずっと持ち続けてほしいですね」

加藤先生は、学生と地域の積極的な交わり大きな期待を寄せています。



加藤ゼミの栗山町でのフィールドワーク

books 先生のオススメ

- ・「地元学をはじめよう」吉本哲郎（岩波ジュニア新書）
- ・「自信力が学生を変える―大学生意識調査からの提言」河地和子（平凡社新書）

books 先生のオススメ

- ・『「壁と卵」の現代中国論―リスク社会化する超大国とどう向き合うか』梶谷懐（人文書院）
- ・「インドネシア―他民族国家という宿命」水本達也（中公新書）



いま、19世紀末から20世紀はじめに日本が密かに製作した朝鮮半島の地図で韓国・北朝鮮の地名を研究しています。このころ、日本は日清・日露戦争を遂行するための必要から、朝鮮半島に密偵（スパイ）を送り込み、軍事用の秘密

地図を作製していました。朝鮮（当時は「大韓帝国」）にも陸軍の密偵が送り込まれ、全土にわたって5万分の1の地図が作製されました。これは朝鮮半島最初の近代的測量による地図と言われています。このように、戦前、日本本土以外の地域（朝鮮、台湾、樺太、中国大陸、南洋諸島を含む）で軍事用に作製された地図のことを「外邦図」といいます。最近、地理学分野では、この「外邦図」の研究が盛んになっています。実は、この「外邦図」のほとんどの地名にはカタカナで読み方が表示されています。これを韓国語の研究に生かせないかと思ったのです。かつて、韓国の地名は二面性を持っていました。例えば「蛇谷」という地名があれば、これを漢字の音読みで「蛇

谷（フリガナ：サゴク）」と読みもし、訓読みで「蛇谷（フリガナ：ペムコル）」（「ペム」はヘビ、「コル」は谷）と読みもしたのです。しかし、その実体はこれまでよく分かっていませんでした。公式的な地名は漢字だけで記録されるものですから、音読みされた地名だけが記録として残っています。しかも、日本による植民地支配の過程で、公式的な地名は音読み中心に定められました。その結果、もともと現地の人々がどのような読み方をしていたの

わかるのです。先ほどの「蛇谷」の例で見るとカタカナで「ヘイムコル」とふりがなが付されていますから、「ペムコル」という訓読で読まれていたことがわかります。こうした資料は韓国側にはありません。地名を外国語と捉えてカタカナで表記した日本側の資料にこそあるのです。

●古代朝鮮語、方言分布研究への応用も
では、地名の読み方が分って何がいいのかというと、まず地名に含まれる訓読みによって、19世紀末の韓国語

のかを知る手がかりにもなるでしょう。何しろ地図ですから、その地名がどこにあるのかを地図上で正確に確認することができるので非常に便利です。訓読みに独特な方言が含まれる地名を地図上で特定するだけで、方言語彙の分布が分かるのです。こうした地図による韓国語の研究はその膨大さによって今まで誰もが手をつけかねていた分野でもあります。

最近、地理情報を処理するソフトウェアの発達により、こうした大容量の地理情報を高速で処理できるようになりました。現在は地図上の地名をすべてデータベース化し、地図の振り仮名と複数の資料をもとに地名の読み方を推定する作業を進めています。昨年、科学研究助成に応募して見たところ、その着想の奇抜さゆえか申請が認められ、研究にますますの弾みがついたところ



1911,12年頃に製作された『舊韓末韓半島地形圖』の復刻版

Report 6 研究のいそぎ ― 外邦図による朝鮮地名研究

■ 水野 俊平 教授

かがわからなくなってしまったのです。

●古地名の読み方がわかる地形図

もちろん、地名の訓読みを調査してハングルで記録した資料はあるのですが、ほとんどが1910年代の資料で量的に限られていたり、20世紀半ばからの調査だったりして、それほど時代を遡ることができるわけではありません。また、地元の人は地名の読み方を知っているのですが、それが必ずしも公式的な記録には残っていないのです。その点、この「外邦図」は19世紀末～20世紀初頭の朝鮮半島の地図です。朝鮮半島全土がカバーされており、さらに地図という資料の特徴として、その地名の位置がすぐわかります。そして、その地名を調べれば、地名が音読されていたか、訓読されていたかが

の実体分かります。さらに地名というのは変化しにくい保守的なものですから、意外な古語が含まれているかもしれません。実は、古代韓国語の資料というのは皆無に近く、特に高句麗・百濟・新羅の言語がどのようなものであったのかはよく分からないことが多いのです。地名の訓読みによって、その古代韓国語の一端が明らかになる…かも知れないのです。さらに、地名というのは各地方ごとに特色があるものですから、当然、地名の訓読みにはその地方の方言が含まれているはず。方言調査などままならなかった19世紀末の方言の分布がどうであった

Report 7 大内東教授がR12背骨プロジェクトを推進

観光産業学科の大内東教授は、2009年より、札幌と旭川を結ぶ国道12号線を背骨にみたく、空知を中心に、石狩・上川も含める地域全体の経済発展を目指すプロジェクトを推進している。

R12の両端、札幌市と旭川市は北海道の2大都市であり、観光の面から見ても昨年の入込客数も1位と2位であった。しかしながら、その間に位置する地域の経済はこの2都市と比べて大きな差がある。観光客も札幌から旭川、あるいは旭川から札幌へと移動し、中間の地域には立ち寄ることはほとんどない。

近年、観光の形態は、＜団体旅行、発地型商品、売れ筋商品＞から、＜個人旅行、着地型商品、ニッチ商品＞へ

と急速に変化している。地域が個別に対応するのではなく、連携をとりR12背骨ゾーンとしてこの変化に対応することが必要であるとのこと。

R12プロジェクトは段階的に、情報発信、人的交流、物量ビジネスと6年間の計画されている。

これまでの実績は、埋もれた観光資源を掘り起こすために、2年間に札幌、岩見沢、奈井江、美唄、滝川、赤平、深川でタウンミーティングを実施し、年度の終わりには全体シンポジウムを開催した。砂川市で開催された2010年度シンポジウムでは、北海道ゆかりの文学を読む朗読もあり、参加者の感動を誘った(写真①)。

また、ケーススタディとして、道新観光ぶんぶんクラブと共同で開発した

日帰りバスツアー、「美唄“B級グルメ”と歴史・芸術・自然にふれる旅」は好評で受付から数時間で定員をオーバーする状況であるという(写真②)。

一方で、専門の観光情報学の立場から情報技術の活用も視野に入れている。埋もれたR12沿線地域の観光資源を調査してdb化、無線LAN (WiFi) の活用提案などを行っている。

プロジェクトメンバーは、地域活性化の三者と言われる、「ばか者、わか者、よそ者」を中心に、観光事業者、有識者、地域住民、行政などが参加して活発な議論がなされている。

大内教授は「このプロジェクトは参加・退出が自由で趣旨に賛同する方ならばだれでも参加できます。来年3月には第2回シンポジウムを旭川市で開催する予定です。どうぞご参加下さい」と話している。



写真① 2010年度シンポジウム



写真② 北海道新聞観光ぶんぶんクラブの紹介記事

Report 8 企業訪問報告

●人的資源管理論Iフィールドワーク報告

12月8日、人的資源管理論Iの講義の一貫で㈱セイコーマート本社を訪問しました。この講義は経営資源のうち、最も重要な「ヒト」に着目し企業訪問をしています。今回は、身近な存在で経営手法にも顕著な特性を持つ同社を訪れました。現場では、資料とは違う実際のマネジメントを観察することができました。顧客ロイヤリティをいかに向上させるかを練る「ロイヤルマーケティング室」や、話題の「ホットシェフ」の調理方法など各種研修を行う「運営支援本部」等、ご多忙の中多くの部署を見学させていただきました。その後、会社概要の説明を受け、

グループ管理部人事課担当者による説明質問する機会を得ました。特に印象的だったのは、「北見で断水が起きて、水が無くなった時、最も近い帯広から僅か2時間でペットボトルの水を配送させた」ことです。これは、同社が類を見ない物流網を配しているからこそ可能だったと言えます。また、北海道の食のインフラを担うという理念を実行し「道内179市町村のうち、169市町村に出店している」そうです。事前

研究時の資料に書かれていた「不断の努力」という記載が頭をよぎりました。今回の企業訪問は、今後の北海道の企業の在り方を考える良い機会となりました。

商学科2年 千葉 宙士

Topics 6 商学科合同特別講義開催

本年度の商学科合同特別講義が12月13日本学305教室で開催されました。講師にHTB報道情報局長の寺内達郎氏を迎えて「報道の役割についてー報道の現場からー」と題しニュース報道の現状や報道機関が直面する諸問題などについて広範に語っていただきました。普段私たちには余り知られる事が

ないニュース報道の裏側ですが、やはり学生たちの関心は高く講演後の質疑応答では学生たちから多くの活発な意見が寄せられました。この企画は学生たちに通常の講義では学ぶことが難しいと思われる現実の諸問題に対する理解と関心を深めてもらうことを目的に専門別ゼミナールの一環として定期的に開催されているものです。今後共ご期待ください。(松原)



HTB報道情報局長寺内達郎氏による特別講義

2011北海商科祭 photo gallery



Report 9 2011年度後期公開講座開催

「東アジアのビジネス・文化交流」が開催される

毎回多くの市民の参加を得て開催されている北海商科大学公開講座の2011年度後期公開講座が以下の要領で開催されました。

- 日時：2011年10月29日～12月10日 10：30～12：30
- 場所：北海商科大学8階会議場
- 参加対象：一般市民（含む学生）
- 入場無料



公開講座の意義と成果

本学の公開講座は平成19年度より、前期・後期の年2回で開催し、本年度で丸5年目を迎えます。その意義は



第4回・何帆（中国社会科学院IWEPI副所長）氏

「アジアの時代にアジアを学ぶ」という本学の特色ある教育に照らして中国・韓国など東アジアの知的関心を高めることにあります。幸いにして毎回80名以上、回によっては100名を超える多くの参加者があり好評を得ております。その成果は単に知識の習得ばかりでなく、国際間の相互理解や草の根レベルの交流促進にも浸透・寄与しつつあるものと理解しております。一筋の水の流れも地道な取り組みがなされれば大河にもなるとのたとえに倣い、今後とも継続的な開催の積み重ねが重要であると考えております。今後も多くの皆さんのご参加を期待しております。（伊藤）

Info 1 新刊紹介

『公民教育の新展開』



●堂徳 将人著
2011年9月20日刊／学事出版／定価2,000円＋税／ISBN978-4-7619-1851-4

『ベーシック税務会計〈企業課税編〉』
『ベーシック税務会計〈個人課税編〉』



●中島 茂幸他編著
2011年10月20日刊／創成社／定価2,600円＋税／ISBN978-4-7944-1424-3
ISBN978-4-7944-1425-0

「マクガバンレポート」—— 医務室から～『二十代の健康』④
医務室 二瓶 妙子

「医学にお金をかけ医療が進んでいるのに、どうして病気の人が減らないんだ！」。フォード大統領のこの発言をきっかけに、『米上院・栄養問題特別委員会』は7年に及ぶ調査・研究を行ないました。

1977年、委員長のジョージ・マクガバン氏の名をとった「マクガバン・レポート」が発表されるとアメリカのみならず多くの国で衝撃をもって受け取られました。

5,000ページにもおよぶ膨大なこのレポートでは「心臓病をはじめとする諸々の慢性病は、肉食中心の誤った食生活がもたらした《食原病》であり、薬では治らない」「われわれはこの事実を率直に認めて、すぐさま食事の内容を改善する必要がある」と述べられていて、食事改善の指針を打ち出し、次のように勧告しています。

「動物脂肪および砂糖や塩の摂りすぎは、心臓病・ガン・肥満・脳卒中等の病気（生活習慣病）と因果関係がある。アメリカ人のおもな死亡原因10の病気のうち、6つは食生活に起因している。脂肪を減らし、精製されていない穀物や新鮮な野菜・果物をもっと食べ、動物食としては魚介類を食べることである」。

また、『食物・栄養とガン』に関する(米)特別委員会の中間報告では、「タンパク質（肉）の摂取量が増えると乳

ガン、子宮内膜ガン、前立腺ガン、結腸・直腸ガン、膵ガン、胃ガンなどの発生率が高まる恐れがある」と述べています。

経済がパンクしそうなくらい医療費が増大（1977年には1,180億ドルー約25兆円）していたアメリカでは、このレポートによって生活習慣病の患者数が減少しているといえます。

さて日本はどうでしょうか。

スナック菓子のおかず、水代わりの清涼飲料水・牛乳、ファストフード、カップラーメン、ケーキ、マヨラーなどetc. さらに、ハンバーグ、カレーライス、ラーメン、牛丼など等…。

この報告で日本食が注目を浴びたにもかかわらず、日本ではいまだに生活習慣病が増え続け、そして低年齢化しています。また、がんも増加中だといえます。



Report 10 後期課外活動報告

初の宿泊サークルリーダー研修会

2011年8月8日(月)～9日(火)の日程で本学初の宿泊による第1回北海商科大学サークルリーダー研修会がNTT北海道セミナーセンタで開催されました。

1つ目のプログラムとして、北海道教育庁石狩教育局教育支援課長の吉川雅樹先生による講演「リーダーに求められる資質」が行われました。その中でPM理論が紹介されサークルの目標実現能力（講師は厳しさと表現＝P）とサークルの集団維持機能（優しさ＝M）との統一がリーダーの資質として大切であること、また「部員のすべてがある意味でリーダーなのだ」ということが指摘され、サークルとリーダーのあるべき姿に関して有益な示唆を与

えてくれました。

2つ目は、同課社会教育指導班社会教育主事の山田智章先生による実技指導が行われ、言葉を使わないコミュニケーションの方法などを学びました。

3つ目は、学生たちによるグループ討議が行われ「よりよいサークル活動をするためには」をテーマに中身の濃い討論が行われました。

研修会に参加した学生達が、サークルでリーダーシップを発揮し、同時にその活動が学士力や人間力の形成に役立つことを期待し、今後もリーダー研修会が第2回、第3回と更に発展し継続されて行くことを願っております。（田辺）



写真①②サークルリーダー研修会、写真③④⑤11月12日に行われ、多数の参加者で盛り上がった今年度第二回体育祭、写真⑥第34回東日本軟式野球大会札幌支部大会（2部）で準優勝に輝いた軟式野球部、写真⑦北海道学生陸上競技選手権大会100メートルハードルで1年生でありながら2位入賞の蒔田ひかりさん（向かって左）

Topics 7 浅羽祭挙行される

学校法人北海学園主催による平成23（2011）年度浅羽祭が10月22日に北海学園大学で執り行われました。浅羽祭は本学園創立功労者である浅羽靖先生の名を冠し、この1年間に逝去された北海学園教職員ならびに学生・生徒の御霊を、ご遺族・関係者参列のもと慰霊しているものです。



浅羽祭にご列席されたご遺族、北海学園関係者

Info 2 今後の行事予定

2011年	
12月中	就職支援各種セミナー
12/17(国)	大学院第1期入学試験
12/27(木)	冬季休業開始
2012年	
1/8(日)	冬季休業終了
1/11(金)	講義再開
1/14(土)・15(日)	大学入試センター試験
1/21(土)・22(日)	大学入試センター試験追試験
1/27(金)	卒業論文提出期限(4年次)
2/3(金)	後期講義終了
2/4(土)	学年末休業開始
2/6(月)	学内TOEIC試験
2/7(火)	後期成績開示開始
	成績・採点異議申し立て受付
2/9(水)	成績・採点異議申し立て受付終了
2/13(月)	一般入学試験
2/24(金)	一般入学試験合格発表
3/1(水)	卒業生発表
3/3(土)	大学院第2期入学試験
3/18(日)	卒業式・卒業祝賀会
3/22(水)	学年末休業終了
3/23(金)	新2年次ガイダンス
	新3年次ガイダンス
3/26(月)	新4年次ガイダンス
3/26(月)・27(火)	新2年次履修登録
3/27(火)・28(水)	新3年次履修登録
3/28(水)・29(木)	新4年次履修登録
3/30(金)	履修登録訂正日(全学年)